



紙つぶて

「PM2.5」。今年初めに突然ニュースに現れたこの言葉ですが、もう「午後二時半のことですか?」という方は少なくなっただでしょうか。以前、PM10(ピーエムテン)が中心だったころは、大気科学のごく一部の人だけに通じるマイナーな専門用語でした。Pはパーティキュレート、粒子です。Mはマター、物質ですが、PMで大気中に漂っている微小粒子を指しエアロゾルともいいます。2.5は「2.5ミクロン以下」という意味です。

2.5ミクロン以下の粒子は呼吸とともに肺の奥まで入り、呼吸疾患の原因になるので、中身にかかわらず一定濃度で規制する基準を環境省が決めたのは二〇〇九年です。それ以降各地で測定が行われていま

PM2.5

大気中には肉眼で見えないPMがたくさん漂っていますが、ほとんどは土壌粒子など、人体に無害なものです。しかし、工場や自動車の排ガスなどが化学変化を起こしてできたりする有害なものも小さい粒子に多いのです。いま大陸から流れてくること

が問題になっていますが、一九七〇年代の日本の工業都市は同じようなものでした。当時はエアロゾルの研究が進んでおらずPM2.5も測定されていませんでした。

今年の富士山観測では、阜山史郎東京農工大教授のグループがPM2.5を測定します。阜山さんは離島や航空機観測で苦勞

を重ねたこの分野の第一人者なので自由な大気中での

データを期待しています。

(土器屋 由紀子 富士山

観候所を活用する会理事)

